



「かまくら」に関する史実的考察(I) :  
野外教育の学習内容に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城後, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00005050">https://doi.org/10.32150/00005050</a>

## 「かまくら」に関する史実的考察（I）

－ 野外教育の学習内容に着目して －

城 後 豊

北海道教育大学札幌校保健体育科教育学研究室

### はじめに

秋田・横手の人が“小学校の頃、優しく、温もりのある母親の手をしっかりと握りしめ、暗い闇の中に大きく立ち上がる真っ白なかまくら、不思議なもし火に輝く、にぎやかな語らいの様子を幾度も見に行った。その後、横手川の堤や北小学校の校庭、お城跡の「ミニかまくら」の幻想美に魅せられ、毎年、私にとって『2月のかまくら祭り』は、心の行事となっている。”と、語ってくれた。

この『横手かまくら』については、ドイツの建築家ブルーノ・タフトが“雪中の静かな祝祭だ。いささかクリスマスの趣がある。空にはえる満月。凍てついた雪が靴の下でさくさくと音を立てる。実にすばらしい観物だ！誰もこの子供達を愛せずにはいられないだろう。（ブルーノ・タフト著、日本美の再発見、岩波新書、1936.）”と、絶賛している。タフトが見た横手旅情は、昔ながらの叙情がのこる“山と川のある町”にふさわしい表現だと、深く感銘した覚えがある。しかし、今日の全国各地の“模擬かまくら祭り”を見たり、聞いたりする折り、雪国の厳しい冬を過ごして来た者にとっていささか思い知るものがある。元来、横手かまくらは、昔から『水神様のお祭り』と聞かされ、子どもたちの“冬の娯楽遊び”と認識していた。また、温かく思いありのある人々が、長い年月の間守り続けて来た“郷土の伝統文化”でもある。今でも、かまくらは、人々が自然との共生の中で生みだした冬の行事であり、さらに神事的行事として生まれ、風俗・風習の歴史に支えられた意味深い民族的行事として理解している。また、いずれの「かまくら」も、ふるさとの自然や文化の素晴らしさを再発見し、タフトがかまくらの結びのことばとして“ここにも美しい日本がある。それはおよそあらゆる美しいものと同じく”の問い掛けに答え得る学習教材でもある。

これら伝統的な文化や野外体験の活動は、2002年から実施される新教育課程における「総合的な学習の時間（以後、総合学習）」<sup>(59)</sup>において、教材としての学習内容を包含している。つまり、野外での体験的な学習には、地域の人々の生活習慣や生活風習によって様々な捉え方が不可欠であり、地域の民族・伝統文化が存在し、史実的内容が存続していなければならない。また、野外における遊びは“人間が学習によって社会から習得した生活の総称として包括された活動であり、衣食住を初めとした技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活様式の内容”を明確にした取り組みができる。したがって、「かまくら遊び」の体験活動は、子どもたちに教材を提供し、自己課題に応じた課題解決型の学習を促すことができる。

そこで、本小論では、野外における冬遊びの典型である『かまくら』に着目し、伝統文化としての内容から“野外における総合学習の文化的・体験的な教材化”の理念を明らかにする。具体的には、かまくらの原義や変遷史を通して、体験学習の基礎・基本的である「自然と人間の関わる学習内容」を明確にし、その教材化の理念と学習内容を明らかにする。

## 「かまくら」に関する先行研究

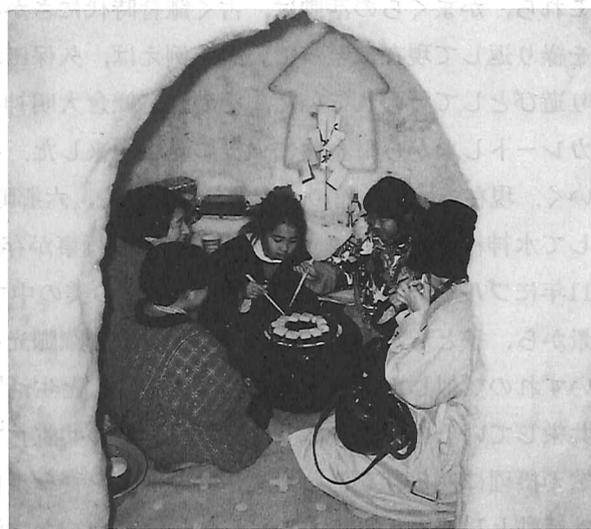
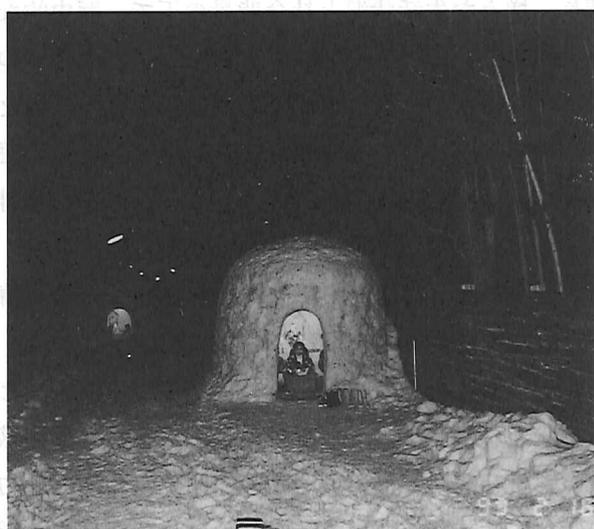
表1 「かまくら」に関する研究一覧

No	年 代	著 者 名	著書名・文献名等
1	1784	菅 江 真 澄	あきたのかりね
2	1788	津 村 淙 庵	雪のふる道
3	1798	人 見 焦 雨	黒拵瑣語
4	1803	菅 江 真 澄	秀酒企乃温湯 (ススキノイテユ)
5	1815	屋 代 広 賢	出羽国領風俗問状書
6	1822	菅 江 真 澄	笹ノ屋日記
7	1829	同 上	雪の出羽路
8	1832	同 上	月の出羽路
9	1875	同 上	筆のままに
10	1837	鈴 木 牧 之	北越雪譜
11	1953	佐 川 良 視	鎌倉の発祥と語源
12	1953	薄 葉 篤 蔵	かまくらの水神まつりその祭具などについて
13	1956	宮 英 二 監 修	北越雪譜
14	1958	同 上	「かまくら」の水神まつりについて
15	1958	同 上	かまくらの水神まつりその祭具などについて2
16	1958	宮 崎 進	かまくらの起源考佐川氏の発祥と語源への批判
17	1961	同 上	かまくらの語源と歴史
18	1969	今 村 義 孝	秋田県史
19	1973	薄 葉 篤 蔵	かまくらの水神まつりその祭具などについて
20	1973	富 木 隆 蔵	日本の民俗 (秋田)
21	1974	七 尾 雅 子	「かまくら」についての民俗学的考察
22	1975	同 上	かまくらの今昔について
23	1975	横手郷土史編集会	横手郷土史
24	1979	田 村 賢 一 訳	北越雪譜物語
25	1979	伊 沢 慶 治	横手の歴史
26	1980	市 川 建 夫	雪国文化誌
27	1981	横手市編集委員	横手市史 (昭和編)
28	1984	伊 沢 慶 治	横手ものしり辞典
29	1984	上 村 政 基	かまくらとホンヤラドウ
30	1984	高 橋 保	鳥追いうたのことなど
31	1986	東北のまつり刊行会	おまつり (あきた)
32	1986	フール・ノ・タウト	日本の美の再発見
33	1987	菅 江 真 澄	菅江真澄民族絵図 (下巻)
34	1988	稲 雄 次	小正月行事の分析視点ーカマクラの構造ー
35	1990	同 上	カマクラとボンテン

表1は、「かまぐらの史実原義に関する資料や文献」を年代順にまとめたものである。これらの記述から「かまぐらの教材化の課題」として、次の4つに概括できる。

- ①かまぐらの派生は、文化生成の経緯や地域生活によって異なる原義がある。
- ②かまぐらは、主に地域の文化的・神事的行事であった。が、時代の流れに沿って子どもたちの雪遊びや祭りへと変化し、生活から遊離してきている。
- ③かまぐらは、雪国の生活文化であり、伝統的な構造や技術が伝承されて来た。
- ④かまぐらは、学校や地域行事の一環として、社会生活の連帯・協働の営みが揺らいでいる。

いずれも、自然と人間との関わりの中で、共存共栄の自然の摂理、及び生活との融合や地域で育まれてきた伝統の業など解決しなければ課題が山積している。特に、現存する「横手かまぐら」<sup>註1)</sup>は、歴史的な伝統文化として継承されている。しかし、今日では、一部の子どもたちが主体的に参加する教育活動や地域社会のイベントや町の観光の象徴として強調されるあまり、伝統文化の形骸化が危惧される。



[横手かまぐら祭りの風景. 1997年]

一方、横手に類似した地域社会でも、「かまぐら」に関する教義・主義などの文化行事として成立させてきた。だが、時代の流れには勝てず大衆文化の崩壊と共に、野外での文化活動は徐々に消滅し、価値内容が伴わない利益者中心の見世物や、短絡的なイベントショーとして細々と存続している。また、本来「かまぐら」の文化価値は、人間と自然との総合的な調和を強調した『習合説』<sup>(45)</sup>にあった。しかし、その活動は、時代の波に押され、従来の精神が満たされない状況に陥っていることは間違いない。

これらから、かまぐら史実を明らかにした異なる教理を折衷・調和する理念と、自然と人間とが共生し合える活動内容や方法について再考する必要がある。特に、文化生成と伝承文化の立場から、教育的な内容を明確にした体験活動の在り方を考究しなければならない。具体的には、かまぐらの史実的な原義に基づく、「かまぐらや雪室」を作り、「神倉・かまぐら祭り」を施しながら、大明神や水神様といった神事的な“伝統かまぐら行事”として「自然と人間との習合体系」を再構築していくことにある。

#### 「かまぐら」の語源

かまぐらは<sup>(7) (10) (14) (15) (16) (21) (33)</sup>、秋田地方における小正月の伝統的な文化行事として、今日まで継承され

てきた。その経緯の中で『かまくら原義』は、今までに様々な論議と批評が展開され、いずれの語源も根拠のある史実的な内容を含んでいる。その中でも、次に挙げる6つの原義説が有力である<sup>(50)</sup>。

- ①カマド説・・・カマドの「かまの座」の意味で、カマドの火で正月の飾り物を焼く習俗とする。
- ②鎌倉権五郎説・・・「武将鎌倉権五郎景政と御霊信仰」を由来とする。
- ③鎌倉幕府説・・・鎌倉幕府を由来とし、その設立を祝う行事とする。
- ④水神様説・・・鎮座する水神様・龍神の祭典とする。
- ⑤鳥追い小屋説・・・鳥追い鎌倉や鎌倉鳥追いから出たとする。
- ⑥カミクラ説・・・神座、神倉（カミクラ）がカマクラとなったとする。

いずれの起源説も、神事や祭典として「小正月の時期の行事」「左義長」「鳥追い」が基底となり発展的に『かまくら』の呼称が生まれてきている。他地域の越後地方（新潟県）などでは<sup>(27)</sup> <sup>(34)</sup> <sup>(54)</sup>、15歳未満の子どもたちの雪遊びとして“せつどう”“ゆきんどう（いきんどう）”“ホンヤラ堂”<sup>(37)</sup> <sup>(52)</sup>などの呼び名で親しまれ、かまくらに類似した野外活動として盛んに行われた来た史実がある。

これら、かまくらの活動は、古く鎌倉時代にさかのぼり、様々な生活状況と社会背景の下で、歴史的な変遷を繰り返して現在に至っている。例えば、久保田地方（現在の秋田市中心）では、武士の子どもたちの火祭り遊びとして行われていた。その後、鎌倉大明神を祭った左義長の火祭りとして大規模になり、一段とエスカレートしながら町全体に火災の発生を来した。その行事も次第に古典的な色彩を失い、地域から遊離していく。現在では、角館の「火振り鎌倉」や、六郷町のかまくら、横手かまくらに残る「おしづの神（龍神）」として水神様を祭るウェット型のかまくら行事が存続している。特に『横手のかまくら』<sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup> <sup>(36)</sup> <sup>(39)</sup>も、昭和11年にブルーノ・タウト<sup>(註1)</sup> <sup>(40)</sup>が、日本の美の中で神秘的な旅情の“光の幻想美”を紹介し、その風情や光景から、子どもたちの文化的行事として一躍脚光を浴び全国的にも有名になっている。

いずれの類似した「かまくら」にも、“雪と生活”において自然との共存があり、自然の中での人間として共栄している。いわゆる「自然と人間との共生」である。さらに、子どもたちを中心に、冬場の季節感や自然の摂理に逆らうことなく文化的な伝統を育み、自然の素材を活用した遊び活動の範囲であり、理想的な野外活動として継承している。しかし、社会的な生活の変化に伴った条件が強調される余り、文化的な伝承的意味が損なわれる傾向がみられる。特に、全国の至る所で行っている“模擬かまくら”に問題があり、営利を目的とした観光中心の客寄せ的な役割を担い、軽々で安易な町起こし行事になっている。言い換えれば、かまくらの原義を踏まえず伝統的な文化価値に無頓着な活動であることを否定できない。

したがって、学校教育の一環として実施する総合学習では、地域の伝統文化を基軸にした「かまくら原義」の史実に基づく学習活動であることが望ましい。そして、子どもたちの実態に応じた学習目標や活動内容を整備し、実践的な自己の学習課題を通して教材化を図らなければならない。

### 「かまくら」と野外遊び

江戸時代の紀行家菅江真澄は<sup>(註2)</sup> <sup>(2)</sup> <sup>(3)</sup> <sup>(5)</sup>、東北地方の風俗・民族を調べ続け、「かまくら」に関わる生活的内容を遊覧記の中で、童遊びの一端として次の様に描写している。

“わらべ、かまくらあそぶとて、やよりたかき雪をうがち大なる穴をほり、そが中に笹のともし  
火して、あらぬさまかたりて更ぬ。（あきたのかりね、1784.）”<sup>(1)</sup>

“民安く秋田刈るてふ鎌倉の燎<sup>にはび</sup> ややがて萌る苗代（笹ノ屋日記、1822.）”<sup>(4)</sup>

“男わらべ門々の雪（六郷の鎌倉、1824.）”<sup>(50)</sup>

いずれも、雪の中での左義長や歳の神を祭る勇壮な火祭りは、遊びと神事的な行事が一体となり、子どもた

ちが戸外で元気に遊びに興じる様子が伺える。

さらに、佐川良視は「横手郷土史料第二十六号“鎌倉”の発祥と語源(1954年)」<sup>(10)</sup>の中で“道祖神祭り”<sup>どうそじん</sup>といて、十五歳未満の少年達によって内町(侍屋敷町)で行われた左義長(三毬打)<sup>さぎちよう</sup>、即ち止牟止(爆竹)<sup>とんと</sup>であり、(略)”と述べ、鳥追いや左義長の行事の変遷を明らかにしている。また、明治以後のかまくら<sup>(11)</sup> <sup>(12)</sup> <sup>(13)</sup> <sup>(20)</sup>、子どもたちの水神様を祭る行事として横手地方を中心に盛んに行われてきたとしている。

一方、秋田地方に限らず越後の風俗を描いた鈴木牧之の「北越雪譜」<sup>ほくし</sup> <sup>ほくえつせつ</sup> <sup>ぶ</sup>、1800年代の“童遊び(初編巻之下)”<sup>註3)</sup> <sup>(6)</sup> <sup>(26)</sup> <sup>(33)</sup> <sup>(53)</sup>の中で、次の紹介をしている。

“わらべの雪遊びをなす事さまざまありて、暖国にはなき事多し。その中、暖国の人にはおもいもよらざる遊びあり、まず雪を高く堀揚おきたる上などを童ども打よりて手遊びの木鋤にて平らになしてふみつけ、(略)”

この野外遊びは、「雪ン堂」<sup>ゆきどう</sup>または「城」<sup>しろ</sup>と呼び、雪を固めた囲いを作り、天神様や恵比寿大黒様を祭って、ものを煮たりして夜どうし群れ遊ぶ雪国の子どもの様子が詳細に述べてある。また、“鳥追い櫓”<sup>(24)</sup> <sup>(34)</sup>でも鳥追い歌に興じる子どもたちの遊びの様子を同様に紹介している。

これらの地域遊びには、雪国の生活の厳しさと唯一の冬季期間の民衆娯楽が折り重なって、雪国ならではの風情や伝統的な野外遊びの大切さを垣間見ることができる。また、かまくらに類似した雪遊びにも、子どもたちを中心としたレクリエーション的な民族行事や祭りであった。その活動は、地域交流のコミュニケーション生活を支え、作物の豊作祈願のお祈りとして生活に密着した野外での文化活動として価値がある。すなわち、「かまくら行事と野外遊び」には、神と人々との融和を求め、地域自然と融合した伝統文化の典型として意味深く、数多くの学習内容を包括している。

### 「かまくら」のつくりと業

かまくら史実を辿れば、越後地方の暮らしを紹介した鈴木牧之の「北越雪譜」の“鳥追い櫓”や“雪の堂”<sup>(28)</sup> <sup>(35)</sup> <sup>(55)</sup>の中に、秋田地方のかまくらに類似した構造と技法を見ることができる。

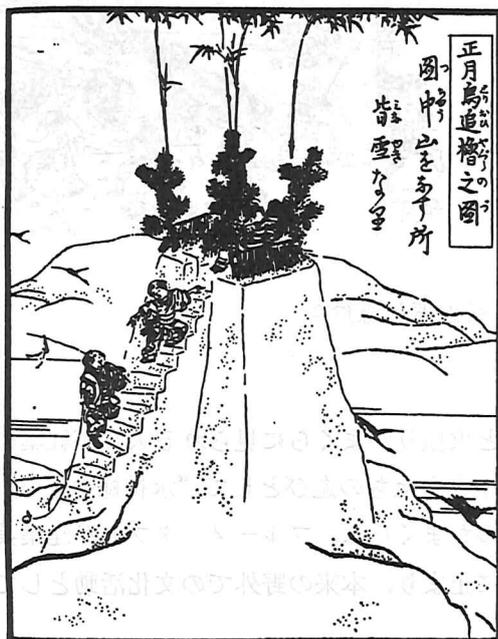


図1 [北越雪譜, 鳥追い櫓, 1837.]

図2 [北越雪譜, 雪の堂, 1837.]

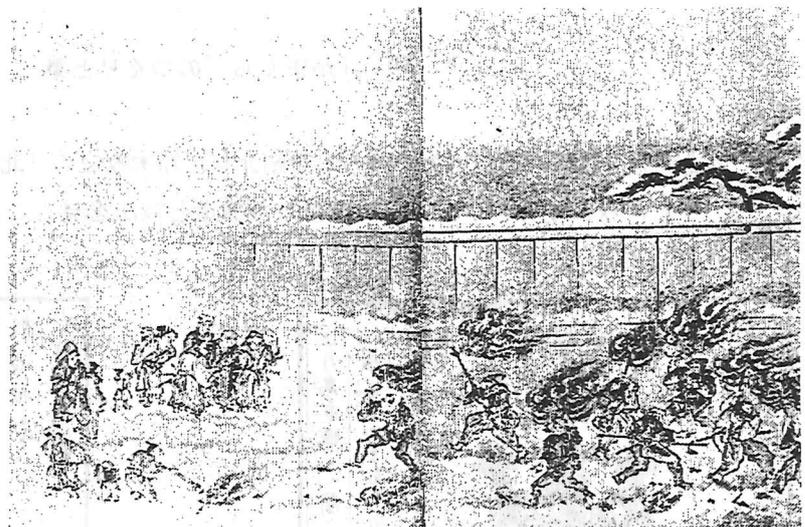
図1にあるような四方に松や竹を立て、しめ縄を張り渡し、鳥追い行事の舞台が初期の原形を止めている。また、越後湯沢・塩沢地方を中心とした図2にあるような、「ゆきんどう（いきんどう）」など、『雪室や城』と称するかまくら行事の原形がある。しかし、現在では、リゾート化した生活環境の変化や余暇活動の転換などが影響し、昭和30年頃を境にほとんどの地域で業の伝承は途絶えている。ただ、いまだに新潟十日町市赤倉地区では古式に乗っ取って“鳥追い行事”<sup>(38)</sup>が行われている。また、信州飯山では大きな雪洞を「男どうろくじん道陸神」、小さな雪洞を「女道陸神」と呼んで一坪（3.3平方メートル）ほどのかまくらに類するつくりのものがある<sup>(29)</sup>。さらに、かまくら文化の西限として長野県北安曇村小谷村大綱に道祖神祭として同じ形態の雪洞が存在している。

横手かまくらは、江戸時代の仙北地方（現在の秋田県地方）を紹介した菅江真澄の“笹ノ屋日記”<sup>(4)</sup>の中に、越後地方と同様な「かまくらの形」が紹介されている。

「鎌倉祭りとて、ふり積む雪をかいまね、ついひごの如ごとに切り立たるは、小田さまの形にも似たり。」  
 この様に、秋田地方に限らず積雪の多い雪国のいたる所に“鎌倉の構造”と酷似した文化的な“祭殿”が作られ、地域の祭事や自然環境に応じた伝統が伝承され、保存され、雪国ならではの野外での文化活動が存続している。しかし、時代と共に、かまくらの構造にも変化が生じ、久保田地方では、江戸時代に鎌倉が盛んに行われていたが、時代の中頃になると、俵むなはら（空俵）に木の葉を詰め込み火をつけ勇壮に振り回す鎌倉も、火粉が飛び散り大火災の心配が出てきた。そして、1830年代に禁止令が出され、左義長の儀式と併用した“鎌倉行事”<sup>(47)</sup>が小規模になり段々と下火になり、地域の文化行事から姿を消すことになる。現在、角館の火振り鎌倉に、その原形が残っている。



<左義長絵図>



<火振り鎌倉>

[秋田風俗門状答.1811]

一方、横手を中心とした「かまくら祭り」は、明治時代に入ると火振りかまくらに見られる火花が紅葉のごとく降る風情はなくなったものの、ドーム型に変わる。その後、子どもたちの遊びとして“水神様の祭り”<sup>(12)</sup>となり、清楚に静寂な幻想美として復活する。これらドーム型のかまくらは、ブルーノ・タフトが建築美として絶賛し、かまくら風情や人々の素朴な人情を賞賛しただけに止まり、本来の野外での文化活動としての価値は薄らいできている。

したがって、かまくらの構造や業では、日常の生活史と密着した伝統的な価値や、自然が育む気候・風土

状況を踏まえた季節感に満ちた安全かつ強固な作業の取組みが必要になる。

### 野外教育と「伝統文化かまくら」

野外教育は<sup>(19) (29) (44) (48)</sup>、学校教育の場合キャンプや林間学校等に代表されるように、教科外活動として学校行事の中で野外での身体活動を楽しみ、規律ある共同生活を営むことにある。その中でも、集団生活を通して民主的な集団訓練の場として教育的意義が強調されてきた。だが、余暇時代の到来と共に野外での活動がレジャー化し、興味本位の内容に偏り、その活動や方法が狭義化していく傾向がある。

この動向は<sup>(25) (30) (32) (46) (49) (56) (57) (58)</sup>、野外活動が学校教育の延長上にあるため、安全面や管理面が強調され“画一的で場当たりの指導”を余儀なくしている。また、野外での指導に躊躇するあまり、安全と思える野外施設で“囲い込み指導”を展開し、自然と触れ合うことにより、自然から離脱していく指導の傾向がある。さらに、指導者達も野外での活動に慣れていないことなどを理由に、野外でのプログラム立案や指導の方法に苦慮し、四苦八苦の状態にある。一方、学校教育以外の野外活動でも、商業ベースに乗っ取られた形のマリンスポーツやアウトドアスポーツなどでは、“環境保全”の趣旨が理解されない状況の中で、自然に親しむことより“快楽や享楽”のみが強調され自然破壊は深刻である。

これらレジャー産業の動向は<sup>(18) (22)</sup>、古くから育まれてきた野外における伝統的な文化や技術の発展継承を遅滞させ、消滅させる誘因となっている。いずれも、人間中心の自然利用の開発は、野外活動の精神を逸脱させ、自然と人間を遊離し、自然が営んで来た従来からの文化との共生を閉ざす結果を生み出している。したがって、これからは、野外での伝統的な文化性の高い活動プログラムを積極的に導入し、その対策や方法を講じていく必要がある。

この様な社会背景から、総合学習では、古い伝統を持つ季節感あふれる『かまくら文化』に注目している。その中でも横手や新潟地方に散在してきた「かまくらやホンヤラ洞」は、以前から冬季の“子どもたちの遊び文化”として継承されてきた歴史があった。その活動は、地域の社会の連携や連帯を高め、教育的な効果をもたらしている。しかし、今日の各地方で作成される“かまくら”はアトラクションやショービジネス的発想の“疑似かまくら”であり、単なる遊びの住居としてのイメージや美的感覚に<sup>ほんろう</sup>翻弄され、“行うことより見る文化としての模倣かまくら”の傾向を認めない。このことは、「かまくら」の本来の趣旨から逸れ『人間と自然』との共存や生活を基盤とした一般民衆の伝統的活動の価値が薄れる。

したがって、かまくらの原点に戻った野外における子どもたちの活動として“伝統的な文化行事かまくら復活”をめざす内容と活動意義を的確に捉えた学習を目指すべきである。

特に、野外文化の実践的な視点から、森田らが“人間が自然と共に生きる野生的な世界を意味する。・・・(略)・・・衣・食・住・ことば・風習・心身の鍛練を営むための基本である。”<sup>註5) (41)</sup>と明言しているように、かまくらは野外文化体験の典型であり、子どもたち自らが文化の伝承者として、古くから地域社会にねざした伝統的な総合学習である。その中でも、400年以上も続けられている最も古典的な『かまくら』<sup>(31)</sup>の活動は必見に値する。そして、歴史的な変遷の中で、年中行事の一つとして文化的な内容を野外で実際に体験し、社会人としての基本的な能力を養う絶好の機会を得ている。また、そこでは、子どもから老人まで、かまくらづくりに精を出し、冬の季節や雪質の変化・気候条件などを肌で感じる活動がある。横手では「はいつてたんせ」「おがんでたんせ」など、子どもたちの呼び掛けは、かまくらならではの素朴な雪国の人情あふれる野外での活動がある。さらに、神事的な行事としての人々の生活の営みを回想し、人間らしさを回復する機会が存在している。これら、野外でのかまくらに類する遊びは、同じ積雪の多い雪国新潟地方でも見ることができた。例えば、北越雪譜の“童雪遊び”<sup>(27) (33)</sup>の「いきんどう遊び」にも散見できる。

“児曹<sup>わらべども</sup>右の雪ん堂の内にあつまり物などを煮て神にもささげ、みなよりてうちくう。又間にへだてを  
作りたるはとなりの家に<sup>なずら</sup>准へ、さまざまな事をなしてたわむれ遊ぶ。”

この活動など、雪を素材にした雪遊びや伝統的な雪洞の中のアソビの楽しいひとときが表現され、野外遊びにおける「学びの根幹」ともいえる。

いずれの活動においても、自然の中で五感を通して社会感覚や伝統的な行事の技法を総合的に体験できる。いわゆる、野外かまくら遊びの文化活動は、社会的な態度の育成として他に類を見る事はない。

したがって、『かまくら』は、総合学習の学び方の実践的な内容として、人々との縦社会を隔てることなく、コミュニケーションの場や、地域社会交流の場として意義深い活動が展開できる。つまり、野外における体験活動の趣旨ともいえる「自然と共に生きる心身を培い、社会生活の基本的な行動や様式を習得するための身体活動」<sup>(5)</sup>の理念や、「ものづくりや生産活動における体験的な学習、問題解決的な学習」<sup>(6)</sup>を育む活動に通じる内容がある。

### まとめ

本小論では、野外における自然体験の立場から、かまくらの歴史的な伝統文化について考究した。そして、かまくら文化に関わる内容を“自然と共生しながら、生活の基本的習慣や人間関係を高め、人間らしい生き方について探求する活動”と捉え、自然に触れることの意味価値や体験行動の意義、及び学び方に着目してきた。

その結果、野外教育における学習内容の教材化の視点として、次の4つの知見を得ることができた。

- ①自然と人間；伝統的な文化的行事と自然とが、仲良く生活していく古典的な「かまくらの原義」の史実に着目する。
- ②生活と人間；生活から生成されてくる「かまくら」の文化的な営みに着目する。
- ③技術と人間；気候風土の摂理に応じた「かまくら」の構造様式や業を取り入れた技法に着目する。
- ④態度の育成；伝統的な文化の継承では、「礼」や「儀」に関わる地域や邑意識の共同体として、連帯・協働を図る態度形成に着目する。

### [ 註 釈 ]

註1) 横手かまくらは、“かまくらのように雪の中に掘った穴のかたちを「カマド」と同じなりたちの言葉で「かま」と呼んだそうです。「くら」は神様をおむかえする場所「神座」の意味を持っています。いまでは、水神様に感謝するとともに、子どもたちのすこやかな成長を祈って町のあちこちで行われています（横手市ふれあいセンター「かまくら館」説明書より）”の説明がある。

註2) 菅江真澄は、1754年三河（愛知県）の生まれで18世紀（江戸末期）に陸奥・出羽の国を遍歴した紀行家である。真澄は、数多くの遊覧記を残し、旅のフォクロリストであり、放歴の先々に絵を描き、歌を詠み、業を造っては民俗の採集をした。その生き方は民俗学の先駆者として高く評価されている。

註3) 鈴木牧之は1770年、越後塩沢に生まれる。牧之は、40年間近くかけて、「北越雪譜(1837)」にまとめている。この名著は、雪国越後の自然や生活の様子を豊かに描写し、人間的な視野から表現している。特に、風習習慣を通じて、現実的な生活を直視した初編上中下三冊、二編春夏秋冬四冊、都合七冊からなる真実身のある感動的な書物である。

註4) ブルーノ・タフトは、1880年ドイツ・ケーニヒスベルグ生まれの近代建築家である。1933年来日し、秋田の冬の風物を昭和11年2月7日から8日かけて見学し、圧巻、横手のかまくらを「日本の美の再発見、岩波書店、篠田英雄訳、1986」で紹介している。

註5) 森田らは、野外文化活動 (Activities of Fundamental Life) について、次の三つの観点から内容を捉えている。

(ア) 自然と生活 (Nature & Life) は、自然観察・農林水産業体験・野外生活に体系づけしている。

- (イ) 野外運動 (Outdoor exercise) は、長距歩行・野外遊びを提唱している。
- (ウ) 歴史と伝統 (History & tradition) は、祭りと年中行事・地域調査から教育的意義について提言している。いずれも、自然と生活との絡みの中で、模擬文化体験などを通して伝統的な文化に触れることを強調している。しかし、史実的な検証に基づく、地域文化や伝統的な文化の変遷を理解し、地域振興や地元の人情に触れた解釈や生活技術を身に付ける実践的な分析までには至っていない。

#### 引用・参考文献

- (1) 1784, 菅江真澄, あきたのかりね, (菅江真澄全集第一巻, 内田武志, 宮本常一編, 未来社, 1982, p. 217.)
- (2) 1803, 菅江真澄, 秀酒企乃湯湯 (ススキノイテユ), (菅江真澄全集第三巻, 内田武志, 宮本常一編, 未来社, 1982, p. 74.)
- (3) 1815, 屋代広賢, 秋田風俗門状書 (出羽国領風俗問状書), (菅江真澄全集別巻, 内田武志, 宮本常一編, 未来社, 1982, pp. 339-343.)
- (4) 1822, 菅江真澄, 笹ノ屋日記, (菅江真澄全集第十巻, 内田武志, 宮本常一編, 未来社, 1982, pp. 431-432.)
- (5) 1829, 同上, 月の出羽道, (菅江真澄全集第七巻, 内田武志, 宮本常一編, 未来社, 1982, pp. 181-182.)
- (6) 1837, 鈴木牧之, 北越雪譜, 塩沢町鈴木牧之記念館所蔵。
- (7) 1975, 薄葉篤蔵, かまくらの今昔について, (横手市市役所観光課所蔵)
- (8) 1984, 伊沢慶治, 横手ものしり辞典, 横手市市立図書館所蔵。
- (9) 1990, 稲 雄次, カマクラとボンテン, 横手市市立図書館所蔵。
- (10) 1953, 佐川良視, 鎌倉の発祥と語源, 横手郷土史資料第二十六号, pp. 1-10.
- (11) 1953, 薄葉篤蔵, かまくらの水神まつりその祭具などについて, 出羽路第二号, pp. 17-19.
- (12) 1958, 薄葉篤蔵, 「かまくら」の水神まつりについて, 横手郷土史資料第二十七号, pp. 36-38.
- (13) 1958, 同上, かまくらの水神まつりその祭具などについて2, 横手郷土史資料第三十号, pp. 43-45.
- (14) 1958, 宮崎 進, かまくらの起源考佐川氏の発祥と語源への批判, 横手郷土史資料第三十号, pp. 53-58.
- (15) 1961, 同上, かまくらの語源と歴史, 秋田営林局報, 蒼林100号, pp. 2-8.
- (16) 1961, 同上, かまくらの語源と歴史, 出羽路第十四号, pp. 18-23.
- (17) 1969, 今村義孝, 秋田県歴史, 山川出版, p. 136.
- (18) 1969, 清水幾太郎他, 日本の将来5, 余暇時代と人間潮出版社, pp. 28-36.
- (19) 1972, 斎藤仲次, 図説野外教育, 新思潮社, p. 19.
- (20) 1973, 薄葉篤蔵, かまくらの水神まつりその祭具などについて, 横手郷土史資料第四十七号, pp. 114-116.
- (21) 1974, 七尾雅子, 「かまくら」についての民俗学的考察, 日本文学研究13, pp. 118-127.
- (22) 1974, 朝日新聞社取材班, 日本人の余暇, ダイヤモンド社, PP. 142-147.
- (23) 1975, 薄葉篤蔵, かまくら今昔, 横手郷土史資料第四十九号, pp. 78-89.
- (24) 1975, 新秋田叢書編集委員会, 第三期秋田叢書(十二), P. 15.
- (25) 1975, 長谷川純三, 野外活動指導者の現状と問題点, 体育の科学, Vol. 25, No. 6, pp. 360-361.
- (26) 1979, 鈴木牧之著, 田村賢一訳, 北越雪譜物語, 新潟日報事業社, pp. 50-53.
- (27) 1979, 同上, pp. 64-68.
- (28) 1979, 同上, pp. 114.
- (29) 1980, 市川建夫, 雪国文化誌, 日本放送協会, pp. 192-195.
- (29) 1980, 佐野豪, 子どものための野外教育—教育キャンプの今日的課題—, 泰流社, pp. 12-13.
- (30) 1980, 同上, pp. 17-19.
- (31) 1981, 横手市編纂委員会, 横手市史 (昭和編), 横手市, pp. 876-978.
- (32) 1982, 宮下桂治, 我が国における野外教育の歴史的考察—野外教育の変遷と今日的課題, 順天堂大学保健体育紀要, 12号, pp. 103-104.
- (33) 1982, 鈴木牧之編選, 岡田武松校註, 北越雪譜, 岩波書店, p. 115.
- (34) 1982, 同上, pp. 242-243.
- (35) 1982, 同上, pp. 255-258.
- (36) 1983, 環境教育実践研究会編, 環境教育のあり方とその実践, 家教出版, pp. 17-21.
- (37) 1984, 上村政基, かまくらとホンヤラドウ, 友の会だより19, 十日町市博物館友の会, pp. 2-5.
- (38) 1984, 高橋 保, 鳥追いうたのことなど, 友の会だより19, 十日町市博物館友の会, pp. 6-7.

- (39) 1985, 横手教育委員会, わたしたちの横手市, p. 2-53.
- (40) 1986, プルーノ・タウト, 日本の美の再発見, 岩波新書, pp. 119-128.
- (41) 1987, 森田勇造, 野外文化論, 学習研究社, pp. 40-41.
- (42) 1987, 同 上, pp. 65-66.
- (43) 1987, 同 上, pp. 69-70.
- (44) 1988, 城後豊, 野外活動の指導法に関する一考察, 上越教育大学研究紀要第7巻, p. 160.
- (45) 1988, 稲 雄次, 小正月行事の分析視点—カマクラの構造—秋田民俗, 第14号, pp. 45-52.
- (46) 1989, 日本教育方法学会編, 新教育課程と人間的感性の育成, 明治図書, PP. 29-30.
- (47) 1989, 国立若狭湾少年自然の家, 国立若狭湾少年自然家の概要, pp. 1-2.
- (48) 1989, 国立立山少年自然の家, 立山実践自然体験と子供の成長, pp. 3.
- (49) 1990, 国立若狭湾少年自然の家, 利用の手引き, pp. 1-2.
- (50) 1991, 六合町史編纂委員会, 六郷町史下巻文化編, PP. 604-622.
- (51) 1991, 森田勇造, 祭りと年中行事, 青年友好協会野外研究所, p. 15.
- (52) 1991, 同 上, pp. 61-64.
- (53) 1991, 鈴木牧之著, 宮英二監修, 井上慶隆他校註, 北越雪譜, 野島出版, pp. 144-145.
- (54) 1991, 同 上, pp. 225-229.
- (55) 1991, 同 上, pp. 241-249.
- (56) 1992, 富山県呉羽少年自然の家, 呉羽少年自然の家所報, No.18. p. 2.
- (57) 1992, 富山県呉羽少年自然の家, 自然の中でのびのびと—利用の手引き—, p. 1.
- (58) 1992, 富山県有峰青少年自然の家, グリーンシャワーを浴びよう—研修の手引き—, p. 1.
- (59) 1999. 文部省, 小学校学習指導要領, pp. 2-3.
- (60) 1999. 文部省, 小学校学習指導要領解説総則編, pp. 44-47.